

演じられている伝説

盛岡大学准教授・総研大修了生

佐藤 優

初めまして、盛岡大学文学部日本文学科に所属している佐藤優と申します。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

お手元に「演じられている伝説」というタイトルを付けました今日お話する講演の流れを簡単に示したレジュメをお持ちだと思います。これに従ってスライドを順次ご覧いただきながら説明をしていこうと思いますので、よろしくお願いいたします。

まず、私がこれまでおこなってきた研究と今日お話する講演の問題意識について説明いたします。私が総研大を修了にするときに提出した博士論文は、『伝説と縁起の民俗学的研究』というタイトルで、東北地方における源義経の家来と彼の愛妾にまつわる伝説について論じました。具体的には、義経の家来として武蔵坊弁慶と対照的な人物造形がなされてきた常陸坊海尊の長寿伝説をテーマとしました。もう一つは、静御前の伝説とも非常に類型性を持っている福島県会津地

方の皆鶴姫伝説を取り上げました。

ところで、講演全体のタイトルは「伝説が語るもの」ですけれども、まず「伝説」ということばが、民俗研究の中でどう認識されてきたのかについて柳田國男の考えを簡単に紹介したいと思います。柳田が示した伝説の特徴ですけれども、伝説は自然物と結びつき、信じられており、歴史になりたがる傾向を持つと説いたわけです。さらに、私たちのくらしの中で伝説は、物語として受けとめられていることが多いのですが、伝説は説話ではないと述べています。

こういった柳田の考えに対して、海尊や皆鶴姫の伝説は、寺社の縁起や由来書、あるいは顕彰碑文などで物語として整えられている。つまり、説話として文字化されているものが複数確認できるわけです。そこで、こうした事例を分析する研究視角として博士論文執筆の際重視したのは、口頭伝承と文字文化、つまり、これまで口頭伝承として民俗研究の中で位置づけられてきた伝説が、文字化されていく歴史的・社会的背景について考察してみました。また、これらの伝説は、民俗信仰として伝承されている側面もありますので、それについても検討してみました。

さて、盛岡大学に赴任して気づいたことですが、岩手県には、多様な民俗芸能が前近代から現在まで各地で伝承されています。こうしたことから図1で示したような研究蓄積が確認できます。

とりわけ、本日、二〇二四年度日本歴史研究コースの案内が書かれたパンフレットをお持ちだと思いますが、その表紙と裏表紙で示されている神楽面は、おわほさま花巻市大迫地区で伝承されている早池峰神楽のはやちね一つ岳神楽たけで使用されているものの複製です。この神楽の研究は、図1で示した本

田安次の研究から始まり、民俗芸能の研究史全体を通して見ても多くの研究蓄積を認めることができます。さらに、早池峰神楽は、一九七六年に国の重要無形民俗文化財第一号の指定も受けております。

このように岩手県内には、多くの神楽が伝えられているわけですが、県南の一関市を中心とした地域には、南部神楽が伝承されています。早池峰神楽や宮古市の黒森くろもり神楽は、成立年代を近世以前に遡れるのに対し、南部神楽は成立した年代が江戸時代末期とされています。芸能の古い形態をとどめていると考えられる神楽が、これまで研究者の関心を集めてきました。南部神楽は、こうした研究の動向からすると新しいということであり研究がおこなわれていませんでした。しかし、近年、**図1**で示したようにこの神楽の研究が進展してきました。また、南部神楽の演目には、奥浄瑠璃あるいは地域の伝説を取り込んだ演目が複数確認でき、もしかしたら伝説研究と民俗芸能研究の双方からアプローチが可能な研究対象ではないのかということを学生の卒業論文指導を通して気

岩手県の民俗芸能を対象とした主な研究業績

- ・ 本田安次『陸前浜乃法印神楽』（自刊、1934年）
- ・ 本田安次『山伏神楽・番楽』（斎藤報恩会、1942年）
- ・ 大石泰夫『芸能の〈伝承現場〉論—若者たちの民俗的学びの共同体—』（ひつじ書房、2007年）
- ・ 中嶋奈津子『早池峰神楽の継承と伝播』（佛光大学、2013年）

南部神楽研究の近年における研究業績

- ・ 平泉郷土館編『かぐらの「わ」』全9冊（平泉郷土館、1999年～2002年）
- ・ 一関市教育委員会編『南部神楽調査報告書』（一関市教育委員会、2016年）
- ・ 一関市教育委員会編『一関市民俗芸能調査報告書』（一関市教育委員会、2020年）

図1

づかされました。

さらには、先程ふれた博士論文で重視した研究視角である口頭伝承と文字文化だけでなく、身体表現・パフォーマンスの検討を通して伝説の伝承実態を明らかにするといった、これまでの伝説研究ではあまり指摘されてこなかった新しい研究領域が開拓できるのではないかと考えたわけです。

こうした経緯をふまえ、今回の講演は、南部神楽のある演目の形成過程を通して伝説が語るものとは何かということを考えてみたいと思います。具体的には、一関市萩^{はぎしやう}荘地区の南部神楽保存会^{ふくろう}古内神楽で演じられている「小松の柵」という演目について、これがどのように創出されていたのか、それを可能にした地域的背景はどのようなものかについて資料を提示しながら考えてみたいと思います。また、こうした作業を経た上で、民俗学が、地域史研究にどのような形で寄与できるのかについても少し考えてみたいと思うわけです。この視点は、私が総研大の日本歴史研究コースで展開されている授業「地域研究の方法」で学んだ経験と深く関わることであります。それでは、南部神楽とはどのような神楽なのか、古内神楽が南部神楽の中でどう位置づけられているのかを次に見ていきたいと思います。

まず、南部神楽は、どのようなものかということですが、山伏神楽、法印^{ほういん}神楽、これは修験、山伏が主体となつて演じられた芸能ですが、これを源として江戸時代末期に農民の娯楽的要素が加味されて成立した芸能が南部神楽です。今申しましたように成立年代が江戸時代末期です。広まり始めたのは、幕末期から明治初期といつてよいと思います。岩手県内の他の修験

系神楽と比べたら非常に新しい神楽ということになります。

次に伝承地域ですけれども、岩手県南部や宮城県北部地域に分布しています。後半で映像をご覧いただきますが、舞っている人自身がセリフをつけて物語を語るのでセリフ神楽と呼ばれることもあります。お囃子は、山伏神楽と同じく太鼓、笛、手平鉦てびらがねで演奏されます。演目は、修験系神楽の要素を残す式舞がまず舞われます。式舞というのは、「鶏舞とりまい」や「三番叟さんばそう」といった儀礼的な舞です。それが舞われた後、源平合戦の物語や地方の伝説、あるいは、東北地方の語り物芸として著名な奥浄瑠璃などから題材を取って脚色した劇的要素を濃くした演目が演じられます。

伝承地域についてより具体的にみてみると、伝承地の北限は岩手県北上市となります。北上市は、江戸時代、およそ北上川と和賀川が合流する地点から北が盛岡藩、南は仙台藩となっていました。よって、南部神楽は、旧仙台藩領内で演じられていた神楽ということがいえると思います。次に近年の南部神楽保存会の数を確認するため、**図2**「南部神楽伝承地域と団体数一覧表」を作成してみました。ただ、二〇〇一年の刊行の文献から得たデータで作りましたので、現在は少し変動があるかもしれません。この表からは、岩手県内全体で九三団体、宮城県内全体で九四団体、合わせて一八七団体が確認できます。岩手県内では、一関市が五三団体と最も多い地域になります。宮城県では、一関市に隣接する栗原市が三五団体と最も多い地域となります。この表から南部神楽は、一関市と栗原市を中心に北は岩手県北上市、南は宮城県富谷市とみやや東松島市にわたって伝承されている民俗芸能であることがわかると思います。

南部神楽の現在の伝承様態につきましては、**図3**で示した三つの形態が認められることが指摘

●（公開講演1）

岩手県			宮城県		
市町村数	市町村名	団体数	市町村数	市町村名	団体数
1	北上市	4	1	栗原市	35
2	胆沢郡金ヶ崎町	2	2	登米市 <small>(とめし)</small>	18
3	奥州市	26	3	大崎市	15
4	西磐井郡平泉町	4	4	遠田郡美里町 <small>(とおだぐんみさとちょう)</small>	2
5	一関市	53	5	加美郡 <small>(かみぐん)</small> 加美町 <small>(かみまち)</small>	3
6	大船渡市	1	6	加美郡色麻町 <small>(しかまちょう)</small>	1
7	気仙郡住田町 <small>(けせんぐんずみたちょう)</small>	1	7	黒川郡大衡村 <small>(おおひらむら)</small>	1
8	陸前高田市	2	8	黒川郡大郷町 <small>(おおさとちょう)</small>	1
93			9	黒川郡大和町 <small>(たいわちょう)</small>	5
			10	富谷市 <small>(とみやし)</small>	1
			11	気仙沼市	3
			12	本吉郡南三陸町	2
			13	石巻市	4
			14	東松島市	3

94

計：187団体

※本表は、『かぐらの「わ」データ編』2（平泉郷土館、2001年、53～56頁）に基づき、市町村名と数字を現行市町村名に変換して作成した。

図2 南部神楽伝承地域と団体数一覧表

されています。まず、①のように神社やお寺の祭礼などで神楽が演じられています。南部神楽は、農民の娯楽的な要素が強い神楽と説明しましたが、地域の信仰と結びついた事例も現在確認できるわけです。

次に②「公民館における南部神楽」ですが、神楽が地域づくりの資源として使われ、公民館は交流事業や神楽の上演の場と指摘されています。農民の娯楽的要素が発展し、現在では地域の交流、あるいは地域の人々の娯楽の場といったところで南部神楽が演じられております。この点は、後半で述べることに関わる重要な視点だと思えます。

③「小中学校における南部神楽」ですが、南部神楽が、学習指導要領で示されている「伝統や文化に関する教育の充実」という観点から教材として取り込まれていることが理解できます。また、少子高齢化が進んだ現在、芸能をどうやって伝承していくかというのは、全国の民俗芸能保存会が抱える共通した問題です。BやCは、この課題を乗り越える実践と受けとめること

① 「社寺の祭礼における南部神楽」

地元の神社や家の神などの祭礼に呼ばれて鶏舞などを奉納。

② 「公民館における南部神楽」

神楽が地域づくりの資源として使われ、公民館は交流事業や神楽の上演の場。地域の娯楽全体の中に南部神楽が位置づけられている。

③ 「小中学校における南部神楽」

A：学校が地域学習の教材として運動会の演目などとして南部神楽に取り込む。

B：保存会が、小中学生を保存会の後継者として位置づけ、学校内で指導にあたる。

C：A・Bの混成体。学校自体が保存会の役割を担うような形態。

図3 南部神楽の伝承様態 [橋本2016年：17～19頁]

● (公開講演 1)

ができるでしょう。ここまで南部神楽の大枠について説明しました。次に今回の本論部分にあたる「古内神楽と創作神楽「小松の柵」」について説明したいと思います。

まず、今日の調査地について少し説明していきたいと思いますが、図4の地図をご覧ください。岩手県一関市ですが、今日の調査地について少し説明していきたいと思いますが、図4の地図をご覧ください。岩手県一関市ですが、今日の調査地について少し説明していきたいと思いますが、図4の地図をご覧ください。岩手県一関市ですが、今日の調査地について少し説明していきたいと思いますが、図4の地図をご覧ください。

地図の右側に示したものをご覧下さい。萩荘地区を拡大したものがこれです。実は萩荘地区は、南部神楽の発祥の地とされています。江戸時代、羽黒派の山伏であった自鏡山金剛院が萩荘地区の自鏡山中にあり、そこに山伏が住んで宗教的な活動や神楽を演じていたわけです。南部神楽は、この神楽が基盤となって成立したとされます。右側の地図には、今回の調査地である古内地区と谷



図4 調査地の位置

起島地区の位置も示しております。萩荘の中でも一関市中心部や東北自動車道一関インターにも近く、近年は宅地化が進む地域です。この辺りで伝承されている神楽について今日は考えてみたいと思うわけです。

谷起島地区は、神楽の演目名となっている「小松の柵」があったとされ、「小松の柵擬定地」とされています。地区には、一九九七年に一関市教育委員会が建てた「小松柵擬定地」という標柱が建てられており、それには「一関市萩荘字谷起島と考える説がある」と記されています。

「小松の柵」は、どのような目的で作られたのでしょうか。図5をご覧ください。この案内板によると、永承六年（一〇五二）から康平五年（一〇六二）かけてこの辺りは前九年合戦の舞台でありました。この地方は安倍氏が統治していましたが、朝廷は安倍氏征討を命じ、源頼義



図5 「小松の柵」の案内板(2023年05月07日発表者撮影)

・この場所への設置理由(二〇二三年五月九日・発表者調査)
・読者Ⅱ古内神楽保存会会員の方(一九六五年生)
地域の中学生にこうした歴史があったことを知って欲しかったため、擬定地ではなく萩荘中学校の校門前に作った。

と義家を派遣しました。一進一退のまま九年が経過し、源頼義は、この局面を打開すべく出羽の清原氏と連合軍を組んでこの「小松の柵」に攻め込んできました。この柵は、難攻不落と言われていましたけれども、結局のところは源頼義、義家軍によつて落とされました。その後、安倍氏は盛岡の方に落ち延び、最終的に厨川の戦いで安倍氏が滅んだと説明されています。

ところで、この案内板は、なぜ谷起島地区から離れた現在地に建てられたのでしょうか。聞き取り調査をした結果、案内板を設置した団体が、地域の中学生に自分が通う学校の近くでこういった歴史があったことを知ってほしかったためということでした。では、実際この柵はこの地域にあったのでしょうか。総研大の日本歴史研究専攻を修了された考古学を専門とする先生が調査をしたところ、『陸奥話記』という軍記物語には、安倍氏が築いた柵が一二登場するわけですが、考古学的に裏づけられるのは鳥海柵のみ。その鳥海柵も考古学的に説明できるのは一部だけで、他の一一の柵については、その所在地さえあやふやだということです。

というところで、谷起島地区が「小松柵擬定地」であることが理解できるかと思えます。つまり、考古学・歴史学的に裏づけは取れないが、そういった柵があったとされる地域だということです。言い換えれば、谷起島地区は「小松の柵」があったという言い伝え、すなわち伝説が伝わる地といえるでしょう。

さて、古内神楽ですけれども、南部神楽の成立は江戸末期と先程申し上げましたが、古内神楽はその中でも比較的早い段階の成立とされています。江戸末期、弘化年間ごろ下黒沢神楽しもくろさわから南部神楽を伝授したとされています。上演可能な演目は、儀礼的な式舞のほか、物語性豊かな源平

の合戦の物語などが劇舞として上演されてきました。

上演団体は会員の子どもたちで構成されており、上演時期は、萩荘まつりや地域の公民館で定期的に演じられています。また、一年間の集大成ということで毎年三月に行われる一関市民俗芸能祭でも上演されてきました。昭和五十年（一九七五）ごろまでは、地元の氏神様である春日神社に奉納していたということが二〇二〇年刊行の報告書から確認できます。さらに、江戸時代末期に成立していますので、比較的古い神楽面が現存しており、こちらは一関市の有形文化財として指定されています。こうしたことから古内神楽は、南部神楽の中でも歴史のある神楽団体といえるでしょう。

では、コロナ禍における保存会の活動実態などは、どのようなものだったのでしょうか。現在の実態について聞き取り調査を実施してみました。すると古内神楽は、二〇二三年四月現在、会員が一名で、男性が一〇名、女性が一名の構成で運営されているそうです。また、たまに高校生が一名参加することもあるそうです。

本来は古内地区で伝承されているわけですが、少子高齢化などの影響から地区出身者だけで保存会を運営することが困難になっているということでした。そこで萩荘地区を広く捉え、古内地区出身の方と古内地区以外だけでも萩荘の中に入っている下黒沢たかなしと高梨地区の方で現在は構成されています。

稽古の日ですが、コロナ前は週一回木曜日に稽古をしていましたが、コロナになり全体での稽古はなかなかおこなえなかったそうです。しかしながら、平成三十年（二〇一八）に保存会に入

● (公開講演1)

会した方と令和元年(二〇一九)に入ってきた方の二名は、この三年間自分の体調などに問題がなければ稽古を続けたということでした。

では、「小松の柵」は、どのような内容を持つ演目なのでしょう。これから少しだけですが「小松の柵」の映像を拝見してもらおうと思います。ポイントは、セリフが入っていますのでどのようなことを語っているかを聞いていただければと思います。登場人物は、向かって左側の二人が安倍貞任さだとうと宗任むねとう、同じく右側が源頼義、義家、清原氏です。では、ご覧下さい。

いかがでしたでしょうか。ご覧いただいたようにわかりやすい演出とセリフ回しで構成された演目に仕上がっていたと思います。

さて、この演目がどのようにできていったのか。その経緯については、『岩手日日新聞』二〇二三年三月七日の紙面で報じられていました。二〇二二年に萩荘地区まちづくり協会から『萩之庄(萩荘)の



写真 「小松の柵」の一場面

伝説 昔あったつもな』が出版されました。この中に「小松の柵の合戦」という物語が収録されています。そして、この本の編集委員の一人が古内神楽保存会の方でもあったわけです。この方が、「小松の柵の合戦」を神楽の演目として表現できるのではないかと考え、再話した方に許可を取って神楽台本に仕上げ、二〇二三年三月一二日の第三五回一関民俗芸能祭で演目として初めて演じたと新聞は報じていました。

私は、この記事を見たとき、保存会の方が、伝説集を読んだ結果、なぜこれを神楽として表現しなければならぬのかと思ったのか、どういう思いでこの演目を創作していったのかということを知りたくなりましたので、その経緯を聞いてみました。

この「小松の柵」の演目を創作した方は、現在市民センターにお勤めですが、それまで歴史にほとんど興味がなかったということでした。ここに勤め始めてセンターで開催されている郷土史家の方などの講演を聞いて、萩荘には非常に古い歴史があるんだということに改めて気づかされたということでした。

市民センターにお勤めですので、少子高齢化が急速に進んでいることや農地の宅地化によって新しく入って来た方々も多くなり、住民が地域の歴史や文化についてあまり関心を示さなくなっていることや代々萩荘の地で暮らしてきた住民と近年引っ越してきた新しい住民との交流が少ないことを肌で感じていたわけです。そういったことを感じ始めたときに先に取り上げた伝説集が刊行されました。それを受けて、地域の歴史や文化をテーマとする作品を神楽で演じる必要があるのではないか。五条の橋とか屋島合戦のように誰でも知っている物語だけを演じるのではなく、

地域の歴史や文化を題材とする演目を演じる必要があるのではないかと強く感じたということをお教えてくれました。

ここまでの内容をまとめてみると、地域の人が語る郷土史の講座、地域の人によって編まれた伝説集、こういったものがこれまで傳承されてきた民俗芸能に新しい演目を加えていくきっかけとなったといえるでしょう。ここで注目したいのは、そこに住む人のことばが創作のきっかけとなっていることです。大学の先生など外部の人々によって語られた歴史を創作のきっかけとしていない、あくまでも地域で生活を共にしている人のことばが、この演目の誕生する原動力となったことです。では、こうした意識は、たまたま生み出されたのでしょうか。これを生み出す地域的背景があるのではないのでしょうか。以下では「演じられている伝説」を創作できた地域における歴史の語り方について考察を進めてみたいと思います。

萩荘地区で編まれた民俗誌や昔話・伝説集を図6として列挙してみました。①『ふるさとの四季』は、萩荘中学校の社会科の先生が主導し、生徒によって調査がおこなわれた民俗誌的内容を持つものです。本を編む前に昭和五十三年（一九七八）から翌年まで『岩手日日新聞』で「ふるさとの四季」として連載されていました。ですから、一九七〇年代後半に萩荘地区では、地域の生活文化を地元の中学生が自ら調査し、ことばとして紡いでいったことが確認できます。『ふるさとの四季』には昔話も収録されていたので、昔話だけを別刷りとして出したのが、②『萩の里昔話』ということになります。

この本が出された段階で読み手を意識してストーリーを整え、注釈をつけて読みやすくする必

要があるのではないかということが地域の読者から意見として出てきたそうです。つまり、②は、『ふるさとの四季』で得られた調査データそのものをそのまま取り出しただけなので物語として整合性が取れていないなど読み手が理解しづらいものになっていたわけです。そこで、こうした意見を参考に読み手を意識してストーリーを整えたものを刊行すべきとの声を受けて出版されたのが③の『萩の里昔話』^{むがすばなす}でした。

さらには、二〇二〇年に④の『萩荘史跡マップ』をつくりました。これには、萩荘地区にある史跡や伝説の伝承地などが地図上で可視化されています。それを携帯しながら史跡や伝承地散策を楽しむために作られたそうです。この作成過程でこれまでの書物では紹介されていない話も多く確認されたので、こうした話をまとめて改めて上梓したものが、⑤の『萩之荘（萩荘）の伝説 昔あったつもな』ということになるわけです。

①『ふるさとの四季』（一関市立萩荘中学校、1980年）

※萩荘中学校の社会科教諭が主導し、同校生徒が萩荘地区で調査をおこなって記述された民俗誌。
本の一部は、昭和53年4月から昭和54年3月まで『岩手日日新聞』で「ふるさとの四季」して連載。

②『萩の里昔話』（萩荘文化財研究会、1999年）

※①書から昔話の部分抜き出し再編したもの。

③『萩の里昔（むがす）話（ばなす）』（萩荘文化財研究会、2018年）

※読み手を意識し、ストーリーを整え、注釈をつけたりして読みやすくしたもの。

④『萩荘史跡マップ』1～3（萩荘まちづくり協議会、2020年）

※萩荘の史跡・伝説の地をマップ化したもの。

⑤『萩之荘（萩荘）の伝説 昔あったつもな』（萩荘地区まちづくり協議会、2022年）

※④書の作成で、上記書物に掲載した以外の話が多く確認できた。そうした史跡や伝説に基づく話16編と創作昔話7編で構成。挿絵は「市民センターだより」の呼びかけに応じた地元の小中高生によるもの。

図6 萩荘地区で編まれた民俗誌と昔話・伝説集

● (公開講演 1)

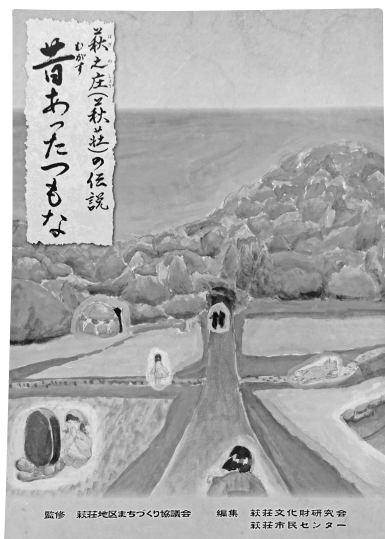


図 7

この本が面白いのは、**図7**や**8**で示した挿絵は、すべて市民だよりで呼びかけた地元の小中高生が描いている点です。こうした試みは、先に示した案内板と同様の目的があったことが読み取れるでしょう。つまり、地元の小中高生に自分たちが住む土地に古い歴史や伝説があったことを再確認してもらうため、こういった挿絵を子どもたちに求めたという



図 8

ことがいえると思うわけです。

次に、これまで萩荘で刊行された郷土史関連の本を
図9として示してみました。①の『萩荘村史』は、萩
荘村が一関市に合併されるとき記念として萩荘村役
場の職員で歴史に詳しいお二方が編者となり出版され
ました。その後、①よりもう少し正確な地域史を編集
したいという地域の願いから、先に図5として示した
案内板を制作した萩荘文化協会が、①書を編み直して
上梓したものが②『萩荘史』となるわけです。

そして、先に示したマップの前段階として冊子体の
史跡文化財巡りマップである③書を萩荘文化財研究会
が一九九八年に出しました。これを出すきっかけは、
やはり地域から萩荘史記載の史跡を訪ねたいが場所が
分からないなど意見が研究会に寄せられたそうです。
これを受けて携帯に便利な大きさの冊子体のもので、
史跡巡りの六コースを提示して出版されました。身体
を使って歴史を感じてもらおう、そうした体験を準備す
る本が、一九九〇年代末に刊行されていたのです。

①小岩孝一郎・千葉庄松『萩荘村史』（萩荘村役場、1955年）

※萩荘村が一関市に合併される際編まれた村史。小岩氏は村役場職員。千葉氏は農家。

②『萩荘史』（萩荘文化協会、1991年）

※①書は、記述内容が粗いのでもう少し正確な地域史を編集したいという思いから編まれた。
萩荘文化協会は1986年設立。上記千葉氏も設立メンバー。

③『史跡・文化財めぐりMap』（萩荘文化財研究会、1998年）

※『萩荘史』刊行以後、史跡などの位置が分からないという声が寄せられたので、「前九年の役
コース」など6コースを提示し、コース内における史跡・文化財の位置を地図で示し、簡単な
案内文を載せたもの。

図9 萩荘で刊行された郷土史

さて、だんだんまとめに入っていくわけですが、これも生み出す背景は、自分たちの地域の歴史や文化を二〇二三年に創出されたわけですが、これを生み出す背景は、自分たちの地域の歴史や文化を自分たちのことばで語ってきた萩荘地区の数十年にわたる試みの存在が指摘できるのではないのでしょうか。その試みは、文字だけでなく歴史マップの作成おこなったことで身体感覚を通して過去へ迫る方法も獲得し得たといえるでしょう。こうした背景が重なり合った結果、パフォーマンスから地域の歴史を伝える方法、つまり神楽の演目の創出へとつながったと考えることができると思います。さらには、先行文献や芸能に対して寄せられる様々な意見を受けとめ、過去の言説を更新してきた動きも伝統的な演目以外に新しい演目を創り出す原動力とみなすこともできるでしょう。

こうしたことが伝説を芸能化できた背景であり、先程指摘しておきました少子高齢化など今地域が抱える問題、そうした現代的課題も意識化されていた土地だからこそ「小松の柵」が芸能として創出されたのだらうと理解できるのです。

そこで、今日の結論ですけれども、萩荘地区における「伝説が語るもの」とは何か。今日の私の講演タイトルは、「演じられている伝説」ということでこれまで話を進めてきたわけです。その結果、「伝説が語るもの」、もう少し詳しく述べると伝説を調査・分析して理解できるものは何か。それは、伝承の担い手が抱く地域への思い、あるいは、地域に対する葛藤、こういったものが、伝説を研究することによって具体的かつ鮮明に理解できるというのが今日の講演の結論となります。

つまり、少子高齢化、そして、他地域から
 移り住んできた人達が次第に増え、だんだん
 地域の歴史が知られなくなる、そういった今
 抱える地域の問題が意識化されてゆく中、地
 域の民俗芸能の担い手である自分自身が地域
 の人々のことばによって、少しずつ郷土の歴
 史を再認識していった。だからこそ、有名な
 物語だけを演じるのではなく、地域の歴史を
 芸能として、地域の人々に向かって演じる必
 要があるという思いが次第に醸成された。そ
 の結果、この演目の創作がおこなわれたと考
 えられるのです。

ちなみに「小松の柵」は、動画のものを含
 めて全部で三回公演されていますが、第二回
 目に公演したとき「岩手県なのになぜ源頼義、
 義家をメインにするような内容になるのだ。
 安倍氏をもう少し立てるような演出をしたほ
 うが良いのではないか」という地域からの意

- ・ 一関市教育委員会編『南部神楽調査報告書』（一関市教育委員会、2016年）
 - ・ 一関市教育委員会編『一関市民俗芸能調査報告書』（一関市教育委員会、2020年）
 - ・ 小池淳一「伝説の継承とその主体」（『地域史研究—尼崎市立地域研究史料館紀要—』第117号、尼崎市立地域研究史料館、2017年、64～68頁）
 - ・ 小島美子ほか編『祭・芸能・行事大辞典』下（朝倉書店、2009年、1303頁。
執筆：西郷由布子）
 - ・ 笹原亮二編『口頭伝承と文字文化—文字の民俗学・声の歴史学—』（思文閣出版、2009年）
 - ・ 佐藤優「民俗芸能として展開する伝説—伝説の研究史を意識しながら—」
（『東北文学の世界』第29号、盛岡大学文学部日本文学会、2021年、44～64頁）
 - ・ 佐藤優「南部神楽研究の課題—付・南部神楽研究文献目録—」
（『東北文学の世界』第31号、盛岡大学文学部日本文学会、2023年、22～35頁）
 - ・ 羽柴直人「安倍氏の「柵」の構造—「交通遮断施設」の視点から—」（岩手県教育委員会事務局
生涯学習文化課編『平泉文化研究年報』第4号、岩手県教育委員会、2004年、13～26頁）
 - ・ 橋本裕之「地域社会に埋め込まれた南部神楽」（一関市教育委員会編『南部神楽調査報告書』
一関市教育委員会、2016年、16～23頁）
 - ・ 柳田國男「昔話と伝説と神話」（同氏『柳田國男全集』第16巻、筑摩書房、1998年〈1935〉）
 - ・ 柳田國男「伝説」（同氏『柳田國男全集』第11巻、筑摩書房、1999年〈1940〉）
- 〔付記〕本研究は令和5年度盛岡大学学術研究助成を受けたものです。

図10 参考文献一覧

見を取り入れ、動画の演目は安倍氏を敗者ではないような内容につくり変えて演じたということでした。

では、時間が来ましたので、私の講演はここまでにしたいと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。

〔付記〕本研究は令和五年度盛岡大学学術研究助成を受けたものです。また、本稿は当日録音されたものの文字起こしを基本としながらも、当日示した画像資料を組み入れて読みやすいよう文章を整えたものであることを付言します。